

札幌彫刻美術館友の会会報

いずみ

第23号

2008年4月1日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 23



《石川啄木》 (函館市大森海岸 高さ2.5m)

この像はいい、在るべきところに、在るべき姿で、在るがままに、置かれている—美術評論家、佐藤四満美氏は、この像を置いた函館の人びとの深い思いと、作家・本郷新に敬意を払いながらこう言った。台座には「潮かをる北の浜辺の 砂山のかの浜薔薇よ 今年も咲けるや」の歌が刻まれている。
(文・写真 仲野三郎)

目 次

本郷新彫刻シリーズ 23「石川啄木」	表紙
目 次	2
「彫刻芸術の殿堂としてあるために」 橋本信夫会長	3
ミュージアムの窓辺から「ミヤノモリノシンカ」村上隆	4
友の会への応援メッセージ 安味貞治ほか	5
「本郷先生と私」 近藤 泉	6
「作品生み出す芸術家の執念に感動」 大地 淳	7
2008年友の会新年会開催	8
会則改定案まとまる	9
会員消息交流プラザ、展覧会案内ほか	10

おことわり

「本郷新記念札幌彫刻美術館展覧会・行事予定」は期日までに原稿が間に合わなかったため休載しました。

昨年春、旧財団法人札幌彫刻美術館が解散し、新たに財団法人札幌芸術文化財団に統合されたのに伴い、友の会を取り巻く環境も変化した。新しい体制がスタートして一年、これからの友の会の進むべき道は？

「彫刻芸術の殿堂としてあるために」

札幌彫刻美術館友の会 会長 橋本 信夫

財団法人札幌彫刻美術館が札幌市芸術文化財団に移管され、本郷新記念札幌彫刻美術館と名称を改めてから早くも1年が過ぎました。この間、当会では新事態に対する会員や市民の声を確かめつつ、美術館との関係改善を求めて運営母体の札幌市、札幌市芸術文化財団と様々な話し合いを重ねてきました。

さらに美術館の変革を機会に、友の会も運営体制と事業計画の大幅な改善を図ることとし、その第一歩として会則を改正することにしました。改正の要点は、当会の名称はそのままとするものの、事務局住所を市側の要請にもとづいて本郷新記念札幌彫刻美術館外に改めたことです。また友の会の設立目的は創設当初から、単に本郷新の彫刻芸術の顕彰や札幌彫刻美術館の運営を支えるばかりでなく、彫刻の鑑賞・研究を通じて彫刻芸術の振興に寄与するとうたわれています。そこで当会ではこの美術館に対する四半世紀にわたる支援の伝統と活動実績を踏まえて、会の目的と事業内容はほぼ従来通りとしながらも、美術館の事業活動へのより積極的な協力を図るとともに、彫刻家への支援ならびに彫刻の鑑賞、研究、

情報収集や広報活動をこれまで以上に力を入れて取り組むこととしました。

友の会が自主運営を開始して以来の5年間、当会では市内や道内の数多くの野外彫刻作品についての情報収集、情報の資料化、解説、保全、美術教材作りや観光資源化などに積極的に取り組んできました。

こうした中、市や道の管理下にある野外彫刻やモニュメントなどのパブリックアートの情報や維持管理に関しては公的な美術館に指導的役割が期待されることは言うまでもありません。

彫刻芸術をこよなく愛し、美の殿堂やパブリックアートへの奉仕を志す会員や市民が彫刻美術館と緊密な連携を保ちながら、官民一体となって国際文化都市札幌にふさわしい芸術文化振興の環境作りに取り組むことの意義は計り知れないものと思われま^{たの}す。さらに、福沢諭吉流に言えば、「館を^{たの}待まず」よろず支援努力を惜しまないとするのが友の会の心意気です。友の会がこの実現に向け、時代や状況を超え、いつまでも努力し続けられるよう願っています。

「ミヤノモリノシンカ」

札幌宮の森美術館ディレクター 村上 隆

総合開館から2年、早いものである。最近よく「札幌宮の森美術館はいつ来ても進化しているね」と言われる。といっても、企画や展示物のことではなく建物の外観であるとか内装の話である。札幌宮の森美術館は「結婚式場に併設された現代美術館で、世界的にも類まれなる施設」と説明したらカッコイイが、元は参列者の通路兼待合室代わりのギャラリー。施設のあちらこちらに手を入れ改修しなければならなかった。展覧会の合間を縫っての非能率的な作業だが、柱や梁の出っ張った壁面がフラットになり、間仕切りや扉が新設され、小窓がふさがれ、照明器具も変更された。外観もつい最近大幅なモデルチェンジを終えたばかりだ。商業ビルだから時流に合わせて化粧を変えていくのは当然と言えば当然だが、言っただが大して商売に貢献しているともいえない美術館のスペースまで、根気強く改修を繰り返してくれるビルオーナーには正直頭が下がる。聞けばさらなる改造計画があるのだとか。

進化と言えば手前味噌だが、運営体制も若干強化された。個人レベルで引き受けた館の運営だったが、今は「芸術文化事業支援機構（CAPSS）」という大げさなNPO法人として数名のスタッフを抱える組織となった。そのおかげで館外活動が一挙に増えた。今は札幌から東京、福岡を飛び回る「移動人生」を楽しんでいる。

こういうとずいぶんのんきな男と思われそうだが、美術館の知名度が上がるにつれ広報担当としての立場も重くなって来た。新聞、雑誌の取材はもとより、去年は公的機関からのスピーチ依頼まで受けてしまった。専門知識など何も持たない私をスタッフは心配してくれたようだが、ゆっくりではあるが札幌宮の森美術館は確実にシンカしている、と思う。クリストとジャンヌ＝クロードの両氏に始まり、森山大道氏、ヤノベケンジ氏と、世界的なアーティストを招聘できたことはまったくの幸運であったが、この小さな美術館にも大きな可能性があることを実感できたし、道内作家を取り上げた企画展「SCNDOSCAN 2007」にも多くの熱いメッセージをいただいた。まだ規模は小さいがミュージアムショップの活動も見逃せない。個性的なアイテムが少しずつだが増殖を続けている。

これらすべて、ひとえにスタッフや協力者、応援してくださるお客様のおかげだが、まだ美術館のシンカが問われるのはこれからだ。シンカどころか「テイタイ」と「コウタイ」などと言われはじめたら私も潔く選手コウタイしたいと思っている。

札幌宮の森美術館 札幌市中央区宮の森 2 条 11 丁目 2-1 宮の森ミュージアムガーデン内
電話 011-612-3562 ◇6月10日から「この男、危険。／榎 忠展」◇休館 月曜日（祝日の場合翌日）

私の応援メッセージ

一時は春、新しい活動のスタートの前に、10人の方から寄せてもらいました。(五十音順)

■彫刻に魅了され 安味貞治(元館長)

50歳に満たない小さな像が相對し、風のそよぎ、抱かれた花束と共に通わせる心の交流…。旅先の神戸で魅了されたI氏は彫刻「花束」を努力の末、社屋の新玄関に設置した。訪れる人に感動を分かち与えられたらの願いで一。

■仲介の労を 岩本好弘

(開拓の村ボランティア会長)

会長は手だてを尽くしていると思います。この際、館と友の会の各トップに人脈のある方に出馬を願い、仲介の労をとってもらおう段階だと思いません。齟齬の原因は、コミュニケーション不足に起因していたのでしょうか。

■美に目覚めて 大久保史絵子(元副会長)

多くの人たちの輪が大きく広がって彫刻友の会が生まれました。友の会を通して現代彫刻も含め、それぞれの形からかもし出される美しさが少しずつでも分かり、私の人生にも大きなプラスになったと感謝しています。

■工夫したしおりを 北明邦雄(会員)

お客さんが来たら私は彫刻美術館に案内します。本郷さんはOB、ちょっと鼻が高くなる時です。英文パンフがいいですね。しおり(ブックマーク、有料、しゃれた短い解説つきの)があればうれしいです。

■もっと彫刻を 国兼治徳(元高校教諭)

彫刻をより多くの人たちに親んでもらうには、札幌駅の安田侃氏の石像のように、大勢の人の目に触れる場所に像があるといい。例えばバスターミナル宮の沢や大通、新札幌の地下鉄コンコースなどにあるのが望ましい。

■会の趣旨に賛同 中村嘉人(会員)

私こと、不良会員で申しわけありません。会報「いずみ」を隅から隅まで愛読することと、年に一度の新年会に出席するだけの最低会員です。心から申しわけなく思っております。会の趣旨には大いに賛同しております。

■頂点目指して 浪岡 豊明(会員)

友の会は北海道の文化活動の頂点に立つべきと思う。本郷新という屈指の平和主義者の思想を信奉する集団であるからだ。札幌は明治政府の手になる町で民間の活動が貧弱だが、その殻を破って友の会は立ち上がるべき。

■近隣で10余年 橋本洋一(会員)

初めて彫刻美術館を訪れたのは太陽がまばゆいばかりに輝く季節であった。間もなく終身会員の手続きをし、以来、近隣に住み10余年の歳月が流れた。

■クリーン作戦に敬意 吉田重弘

(宮の森明和町内会長)

彫刻美術館が私の町内会の会員という縁で、本郷新が「鳥を抱く女」シリーズの中で一番気に入っていたという作品がわが町内会館の前にあります。地道に彫刻クリーン作戦など本郷新の彫刻を愛し、研鑽を積む姿勢に敬意を表します。

■しがらみを脱して 渡辺行夫(会員)

自身が彫刻家として考える時、積極的に鑑賞する側である「友の会」の主體的な活動の存在には興味がある。彫刻美術館という括りや絡みから自由になってこそ、現役で表現している作家にとっては元気を与えてくれる。

本郷先生と私

別世界からやってきたダンディーで普通のおじさん

本田明二ギャラリー主宰

近藤 泉

私と本郷先生との出会いを書く前に、私の父である本田明二との関係から書かなければと思っていた。しかし、実は出会いについて、父から明確な説明を聞いた記憶がないのである。たぶん、同じ札幌二中（現札幌西高）出身で本郷先生とも親しかった、山内壮夫先生を介してだと思われる。その後、その二人が所属していた新制作協会の公募展に、父も作品を出品するようになってから、一層交流が深まったようである。しかし、それは私が生まれるずっと以前の話で、私の記憶の中の本郷新は、ある場所から始まっている。

小樽の銭函と張碓の間ほどにある春香山の中腹に、1965年、本郷先生はアトリエを建設。石狩湾を望む素晴らしい眺望、白壁の建物は当時としてはとてもモダンで、ちょっと外国みたいな風景だった。その、別荘の完成披露パーティーでの印象が、私の中の最初の本郷新になった。当時六歳だった私は、有名な彫刻家であることを知る由もなく、東京から来たお金持ちくらいの認識しかなかった。その東京の空気は、重子夫人の方が強烈に吹いており、当時、髪を茶色に染めていたり、サングラスをかけていたり、香水の香りがするような女性が周りにはいなかったの、私にとってはカルチャーショック。いつもダンディーな本

郷先生と重子夫人は、何か別世界からやってきた人のように見えたのである。

そんな本郷先生も、私の家に立ち寄ったときには、お茶目なおじさんに変身した。母が作った「たちの味噌汁」をおいしそうに食べたり、ソファで居眠りをしたり、いつものダンディーはどこかに置いてきてしまうようだった。それは、東京の自宅の姿とダブっていたのを、後に分かった。自宅での本郷先生も、アトリエ以外ではちょっと手のかかる普通のおじさんと化していたようである。あの、トレードマークのあごひげも、毎朝、お手伝いの律子さんが切りそろえ、お酒を飲んで歌いだしたり。そう、私の中の本郷新は、実は普通のおじさんなのである。

最後に、本郷先生と会ったのは、父が初めて東京の高島屋で開催した個展のオープニングパーティーだった。その頃、本郷先生の病状がかなり悪化していて、出席は無理かもしれないと聞いていた。でも、「本田君のために」と、無理して来てくださった。かなりやせていたけれど、あのひげもきちっとそろえて、いつものダンディーなままだった。あの春香山での本郷先生と同じ姿であった。

作品生み出す芸術家の執念に感動

——ブロンズ彫刻の撮影を終えて

大地 淳（会員）

それは、衝撃的な撮影だった。出来上がった子供の像の頭の一部が欠けていたのだ。一カ月余り、全力を注いで制作してきた作品が一瞬に失望にかわる瞬間だった。

今後のビデオ撮影の計画が頭をよぎる。周りの人も押し黙ったままだ。何が悪かったのか、その時は知るよしもない。これまでの道程が走馬灯のように頭をよぎった。

昨年7月初旬、撮影のために初めて訪れた小樽のSさんのアトリエは、石狩湾を一望に見渡せる絶好の場所にあり、迎えてくれた彫刻家Mさんの温厚な姿があった。ブロンズ彫刻の作品や道具類が雑然と置かれたアトリエは、いかにも芸術家の作業場の雰囲気だった。これからの彫刻の制作日程の概要を聞くにつけ、今までの制作概念が次第に失われてくる感じだった。当初は一カ月程度の日程と思ったスケジュールが、数カ月になろうとは、知るよしもなかった。

最初は作品の原型を担当する芸大卒の女性彫刻家Sさんを紹介され、8月初旬、札幌のアトリエを訪れた。アトリエは閑静な住宅街の一角にあり、玄関に置かれたブロンズ像を横目にアトリエに案内された。

棚に子供の顔のデッサンがあった。クロッキーというのだそうだ。制作前には必ず描くものだという。

最初の作業は、台座の心棒に粘土の荒付けから始まった。粘土の塊を、ヘラでペタペタたたいているうちに、帽子をかぶるか

わいい原型像が目の前に出来上がってゆく。初めての私にとっては驚嘆するばかりだ。

石膏型の作業に入り、石膏の厚みをつけるために、粘土の像に切り金を入れていく。粘土像の頭にグサッと切り金が入るたびに撮影中の私の頭がズキン、ズキンと痛む思いだった。



蝟型作業になり、小樽のMさんのアトリエに移った。石膏の内側に、特殊な蝟を流し込む作業だ。外側の石膏を外すとチョコレート色の原型が現れた。湯道の作業では、頭部や顔の周りは痛々しいほどのイタドリの茎で取り巻かれた。

最終工程は、江別のSさんのアトリエになった。ここでは、合金（ブロンズ）を流し込む作業だ。大勢の制作者が集まった。1200度の赤金色に溶けた合金を流し込む作業ではみんなの間に緊張が走る。

結果、Sさんの作品は冒頭のとおり失敗だった。青ざめたのは制作者よりも、むしろ撮影中の私だった。原因は分からない。

しかし、制作者のSさんはくじけなかった。再度、挑戦し、立派なブロンズ彫刻を完成させ、展示場に無事出品された。

季節はすでに秋になっていた。

2008 年友の会新年会開催

植物画一筆箋の抽選ゲームで盛況

講演は丹保憲仁氏(道開拓記念館館長)が地球環境保全を訴える

友の会の 2008 年新年会が 1 月 26 日、札幌・中央区の「すみれホテル」で開かれ、60 人の参加者でにぎわった。先立って行われた恒例の講演会には北海道開拓記念館の丹保憲仁館長が講師に迎えられ、含蓄のある講演で出席者を喜ばせた。

新年会は会員の竹津宜男さんが開会のスピーチと乾杯の音頭を取り、船迫吉江さんと須田靖子さんが描いた野の花の名前がついた各テーブルで和やかな歓談が弾んだ。橋本会長が制作中の友の会のビデオ「ブロンズ彫刻できるまで」の「主演モデル」になった彫刻家の椎名澄子さんを紹介、椎名さんが「先輩に突然、呼び出されて断りきれずに協力することになったが、大変勉強になった」とあいさつ、椎名さんを推薦した彫刻家の水谷のぼるさんも「最適だった。



ほかの人では務まらなかった」と合わせた。司会を務めた長峯さんの新入会員の紹介の後、船迫さんの植物画の一筆箋が当たる「じゃんけんゲーム」が行われて会場が盛り上がった。最後に道展会員の橋本禮三さんが「今年一年を元気で充実した幸せな年であるようにしよう」と元気いっぱい一本締めで会を締めくくった。

新年講演会報告

21 世紀の地球環境を示唆 丹保氏の講演に感銘一

新年会に先立って行われた講演会は道開拓記念館の丹保憲仁館長が「21 世紀の日本と北海道」と題し、自作のスライドを駆使して、私たちが置かれている地球環境の現況について示唆に富んだ講演を行い参加者に感銘を与えた。

丹保館長は第 15 代北大総長（1995—2001 年）を務め、その後、放送大学学長を経て、昨年からは現職。稚内市出身で北大工学部卒から同大工学部衛生工学科教授を歴任したわが国環境工学の権威。

講演では冒頭、宇宙から撮影した地球の映像がスクリーンに映された。水を満々とたたえて真っ青に輝く地球表面に白い雲が浮かぶ地球の姿に「地球は青かった」と言った宇宙飛行士の言葉が思い出されて印象的だった。丹保氏は「我々が歩いている辺り」と題して 20 世紀が終わったばかりの地球はこの 1 世紀で人口が 16 倍、GDP（国内総生産）17 倍、エネルギー消費 11 倍に増大するなどし、あらゆることが激変したと説き、「20 世紀、我々はいいいい思いをした。こんなことが長続きするわけがない」と指摘した。さらに数々のデータを示しながら農業、漁業など多方面から地球と水の現状を訴え、環境衛生工学の立場から 21 世紀の地球の課題を解説した。 (大内 和)

会則改定案まとまる 2008年度総会に提案

名称は現行通り「札幌彫刻美術館友の会」

事務局住所は会長宅 役員任期は1年延長

札幌彫刻美術館の芸術文化財団への統合に伴い、昨年の総会で決定していた会則見直しの原案がこのほど決まり、5月開催予定の2008年度総会に提案される。

改定案によると第1条「名称及び事務局」では会の名称を現行と同じ「札幌彫刻美術館友の会」とした。友の会創設以来の精神を重んじ、活動の核はあくまでも彫刻美術館であることをうたうのがねらい。また、芸術文化財団から会の住所表示を美術館としないこととの要請を受け、事務局住所を会長宅に置くとした。

さらに、第2条「目的」では従来通り、館に対する支援と彫刻芸術の振興を掲げ、施設支援

の目的を明らかにした。第5条「会費」では「正会員」(2,000円)は現行通りだが、「賛助会員」を「特別会員」と改め、会費年額5000円のうち3000円は寄付であることを明確にした。さらに、「終身会員」は残した上で、新たに「永年(15年)会員」(20,000円)を設け、「団体会員」の呼称をやめ、「メセナ会員」とし、会費を3万円にした。

第7条「役員、顧問」では、役員の任期を事業の継続性を考え2年(現行1年)に延長したほか、第9条「会議」で会議を総会、役員会、委員会とし、総会、役員会は会長が招集し、委員会は

抜粋 札幌彫刻美術館友の会会則(改定案)

第1条 名称および事務局

この会は札幌彫刻美術館友の会と称し、事務局を会長宅に置く

第2条 目的

この会は本郷新記念札幌彫刻美術館の支援と彫刻芸術の振興に寄与するための活動を行い、あわせて彫刻美術の鑑賞研究を通じ会員の教養を高め、もって彫刻文化の向上に資する

第5条 会費 年会費は次のように定める

正会員2,000円 特別会員5,000円(3000円寄付)

永年(15年)会員20,000円 メセナ会員30,000円

第7条 役員、顧問

本会に注ぎの役員、顧問を置く。役員は会員中から選出し任期は2年とする。ただし兼務、再任は妨げない。顧問は会長が委嘱する。 会長1 副会長2(事務局、委員会担当) 幹事12 監査2 顧問 若干名

第9条 会議

会議は総会、役員会、委員会とし、総会・役員会は会長が、委員会は委員長が招集する。役員会は役員全員で構成し進行は事務局担当副会長、委員会は進行を委員長、会長、副会長は必要に応じて出席する

会員消息 **交流プラザ**

札幌芸術の森に桜を寄贈

「札幌芸術の森を桜の名所にしたい」—そんな芸森ファンである友の会副会長の仲野三郎さんの願いがかなって昨年12月、芸森美術館前にエゾヤマザクラの苗木が植樹された。仲野さんは芸術の森の野外彫刻解説ボランティアの経験もあり、以前から「芸術の森を花の名所にして市民が気楽に立ち寄れるようにしては」と提案していた。その念願がやっと実り、昨年亡くなった夫人の敦子さんとの連名での苗木の寄贈だった。



道新文化賞受賞を祝って

昨年秋、北海道新聞文化賞を受賞した会員・**栃内忠男**さんの受賞を祝って、2月9日、札幌グランドホテルでにぎやかに受賞祝賀パーティーが開かれた。栃内さんは友の会の終身会員でもあり、友の会からも橋本会長らが参加、橋本会長がスピーチをして栃内さんの受賞をたたえた。

展覧会案内

◇「石垣渉水彩画の世界展」

4月15日—20日
ギャラリー エッセ(北区北9西3-9-1 ル・ノール北9条1階 011-708-0606)

◇「栃内忠男ヨーロッパスケッチ及び新作油絵展」

4月29日(火)—5月4日(日)
さいとうギャラリー(中央区南1条西3丁目ラ・ガレリア5階)

友の会2008年度総会5月開催

2008年度の友の会総会が5月11日(日)午後1時から札幌市教育文化会館(中央区北1西13)で開かれる。総会に引き続き、一般参加者も含めてシンポジウムを開催する。

総会は新年度予算案、事業計画案、会則変更、役員改選などを議題にする。

シンポジウムは「効果的な美術館支援の在り方」(仮題)についてパネリストを中心に話し合う。パネラーは塩澤正樹(札幌市観光文化局文化部長)、木村純(北大大学院教育研究科教授)、長峯慰子(美術館協力会理事・友の会会員)の3氏が予定されている。

編集後記

雑誌の編集者と料理人には共通しているところがあると言われる。出来上がった料理をいかにおいしそうに食器に盛り付けるかが料理人の腕の見せ所とすれば、集まった原稿をいかに見栄えのするように編集(料理)するかが編集者の腕だという。と言うわけで、素人ゆえに毎号、力量不足を嘆いている。ページの中に原稿がぴったり収まるようにレイアウトできたときは楽しい。(大内)

札幌彫刻美術館友の会会報「いずみ」No.23

2008年4月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集スタッフ 斎藤美年子：011-643-7246

大内 和：011-884-6025